

茨城高等学校・中学校

## 校長室だより

2024年6月25日

### 夏のうた

今年も夏がやってきました。生命が最も生き生きと躍動する季節です。今回の校長室だよりでは、ちょっと国語の教師っぽく、そんな夏にふさわしい詩や短歌、俳句を紹介していきます。個人的に「う～む」「むむむ」「ふむふむ」などと感じた作品たちなので、有名な作品もあまり知られていない作品も、共感してもらえるものもそうでないものも混在していると思います。夏のうたに耳を澄ませてみてください。

○ ネロ たにかわしゆん た ろう  
谷川 俊 太郎

ネロ /—愛された小さな犬に

ネロ／もうじき夏がやってくる／お前の舌／お前の眼／お前の昼寝姿が／いまはっきりと僕の前によみがえる／お前はたった二回程夏を知っただけだった／僕はもう十八回の夏を知っている／そして今僕は自分のや又自分のでないいろいろの夏を思い出している／メゾンラフィットの夏／淀の夏／ウィリアムスバーグ橋の夏／オランの夏／そして僕は考える／人間はいったいもう何回くらいの夏を知っているのだろうか

ネロ／もうじき又夏がやってくる／しかしそれはお前のいた夏ではない／又別の夏／全く別の夏なのだ

新しい夏がやってくる／そして新しいいろいろのことを僕は知ってゆく／美しいこと みにくいこと  
僕を元気づけてくれるようなこと 僕をかなしくするようなこと／そして僕は質問する／いったい何だろう／いったい何故だろう／いったいどうすべきなのだろうと

ネロ／お前は死んだ／誰にも知れないようにひとりで遠くへ行って／お前の声／お前の感触／お前の気持ちまでもが／今はっきりと僕の前によみがえる

しかしネロ／もうじき又夏がやってくる／新しい無限に広い夏がやってくる／そして／僕はやっぱり歩いて行くだらう／新しい夏をむかえ 秋をむかえ 冬をむかえ／春をむかえ 更に新しい夏を期待して／すべての新しいことを知るために／そして／すべての僕の質問に自ら答えるために

谷川俊太郎の処女詩集『二十億光年の孤独』に収められているこの詩に初めて出会ったのは、高校の国語の教科書だったと記憶しています。ちょうどそのころ家で飼っていた雑種犬が死んでしまったこともあり、「ああ、自分と一緒にだなあ」と思った覚えがあります。

詩は、十八回目の夏を迎えようとする「僕」が、たった二年間しか生きなかった愛犬ネロに呼びかける形式で語られています。ネロとの思い出が詰まった甘美な少年時代と決別するひりひりと

した痛みと、新しい夏を迎え自分の人生へ自分の意志で踏み出そうとする清新な決意とが、アラスカ模様のようにからみ合いながら、十代のみずみずしいことばで表現されていきます。十八歳の作者によって書かれた詩は、高校生だった自分に鮮烈な印象を与えました。読むたびにまぶしい夏の光を感じる詩です。

あえて多くを語る必要もないと思います。詩のことばに心を寄り添わせながら読んでみてください。

注)「メゾンラフィット」は小説『チボ一家の人々』の舞台。「淀」には谷川俊太郎の母の実家がある。「ウィリアムスバーグ橋」はアメリカ映画『裸の町』のラストシーンで登場する橋。「オラン」は小説『ペスト』の舞台。

○ 孤児たちに映画くる日や燕の天 ふるさわたいほ  
古沢太穂

本校は校舎のあちこちに燕の巣があります。新緑がまぶしく感じられる季節になると、校舎の間を軽快に飛びまわる燕たちを目にするようになります。「校長先生、巣の中に燕のヒナがいます」と教えてくれた中学生がいました。巣の下で一緒に背伸びをして見てみると、泥を固めてこさえた巣の縁から、わずかにヒナの姿がうかがえました。親鳥に餌をねだる甘えた鳴き声も聞こえました。

戦後まもなくに詠まれたこの俳句には「港区中里学園にて」という前書きがあります。おそらくは戦争で親をうしなった孤児たちの保護施設だったのでしょう。「映画くる」とは、巡回映画がやって来る、という意味です。娯楽のない時代、学校などを巡り、暗幕で窓を覆った教室で当時まだ珍しかった映画を上映する巡回映画は、孤児たちにとって期待に胸躍る一大イベントでした。ことばの合間から、こどもたちの目の輝きまで見えてくる気がします。そんな彼らの頭上に広がる蒼い夏空には、燕たちが軽やかに弧を描いているのです。

古沢太穂は、加藤 楸 邨しゅうそんらとも親交の深かった俳人です。筋金入りのマルキストで、労働者やデモを題材とする句を詠む一方、こんなやさしいまなざしの句も残しています。

この文章を書いている6月の初め、体育祭、文化祭の準備のため大忙しで動きまわる生徒諸君の頭上には、今年も空をひるがえる燕たちの姿があります。

○ 大きな骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり しょうだしのえ  
正 田 篠 枝

夏は、日本人にとって戦争の記憶と結びつく季節でもあります。歌人正田篠枝は、広島に原子爆弾が投下された1945年8月6日、爆心地から1.5キロメートルの自宅で被爆しました。被爆当時の情景や自らの体験、被爆した人々の痛ましいありさまを詠んだ短歌は、歌集『さんげ』として結実します。原爆の悲惨さをリアルに詠んだ歌集は、GHQの検閲を避けて手渡しで親戚や知人に配られたといいます。1965年、正田は原爆後遺症の癌に冒され亡くなりました。

「大きな骨は先生であるだろうか。そのそばには小さいこどもたちの頭蓋骨が集まっている」。被爆地の学校を詠んだ歌でしょうか。焼け跡に、大きな遺骨がひとつ、その周りを取り囲むように小さな遺骨が集まっています。原爆に焼かれた教師が最後の力を振り絞って生徒たちを守ろうとしたのか、瀕死のこどもたちが助けを求めて先生のもとに這い寄ろうとしたのか、地面に散らばっ

た人骨は何も語ろうとはしません。

「さんげ」は「散華」と書き、仏教で仏を供養するため花をまき散らすことをいいます。死者の痛みを自らのものとし、原爆の非人間性を糾弾する正田の歌は、多くの共感呼びました。『さんげ』からさらに数首を紹介します。

子をひとり 焔ほのおの中にとりのこし我ればかり得たる命と女泣き狂ふ  
可憐かれんなる学徒がくとはいとし瀕死きゆうたんのきはに名前を呼べばハイッと答へぬ  
焼け身ながら家にかへり来て大丈夫と親に言ひしのち息たへゆきぬ

戦争はすべての人にとって大きな悲劇ですが、中でも罪のない子どもたちの犠牲に接するとき、なんともいえない暗澹たる思いにとらわれます。今このときも、ウクライナで、ガザで、子どもたちの命が失われ続けています。

注)「GHQ」連合軍最高司令官総司令部。通称で進駐軍とも呼ばれ、第二次大戦終結後、日本で占領政策を実施した。

○ ほととぎす鳴きつる方をながむればただありあけの月ぞ残れる 後徳大寺左大臣

平安時代末に編纂された勅撰和歌集『千載和歌集』に収められ、『小倉百人一首』にも選ばれている和歌です。ほととぎすは渡り鳥で、初夏、南から日本にやってきます。夏の訪れを告げる鳥として愛され、貴族たちは夜を徹して暁を待ち、ほととぎすの初音(その季節に初めて鳴く声)を聞くという優雅な遊びをしたといえます。

作者は名門貴族ですから、そのような遊びの中で詠まれた歌とも考えられなくはないですが、眠れずに一人悶々と過ごした夏の夜の明け方、恋人との名残を惜しんで帰る暁の道すがらなどの場面のほうが、この歌によりふさわしい気がします。

「明けやすい夏の夜明け、突然ほととぎすの鋭い鳴き声が響いた。急いでその方向を眺めてみたが、すでにほととぎすの姿はなく、空には有明の月が残っているばかりだ」。ほととぎすの鳴き声にはっと空を見上げた作者は、そこではじめて西の空にかかる有明の月に気づくかのようです。ほととぎすが飛び去った後の静寂と空虚、群青の空に弱々しく光る下弦の月、夏の夜明けのひんやりした空気まで感じられるようで好きな歌です。

ところでほととぎすはどのように鳴くのか知っていますか？知らない人は下のURLからほととぎすの鳴き声を聞いてみてください。

<https://www.youtube.com/watch?v=Zm9-TaWCWRM>

注)「勅撰和歌集」平安時代以降、天皇や上皇の命令によって編纂された歌集のこと。特に「八代集」(古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、金葉和歌集、詞花和歌集、千載和歌集、新古今和歌集)が有名。

注)「有明の月」夜が明けた後も空に残る月。月齢15前後～29までの月を指す。



